

---

# バカと転生者と召喚システム

FORCE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと転生者と召喚システム

### 【Zコード】

Z5292Z

### 【作者名】

FORCE

### 【あらすじ】

『バカとテストと召喚獣』に転生した『斬沢 拓哉』が原作キャラたちと楽しく学校ライフを送っていきます。・・・多分

## プロローグ

俺は『斬沢拓哉』。今はとてもありえないことが田の前で起っていたいる。

それは、真っ白な部屋に汚いひげを生やした自称神様がいることだつた。

「それで俺はその神様の間違いでここに来てしまった。といつてか？」

「恥ずかしいことじやがそうなるの?」

俺はここに来る前にお魚加えた野良猫がトラックに轢かれそうになつたところを俺が飛び込んで、結果、お魚加えた野良猫が生き残り・  
・・・・・俺が死んだ  
そして現在に至るそうだ。それより

「俺はこの後どうなるんだ?自称神様」

「わしを自称神様と言つんじやないぞ!・・・・・まずは謝罪と  
して生き返させてやるつ」

「マジで!?

「俺を生き返させてくれるんですか!?」

そうしたら俺はいろんな人に揉められるんだろうな~  
トラックに轢かれても死なかつた人~みたいな

「と言つても、お主が生き返つてもお主の体はもう焼かれておるだ

自称神様はどつかから取り出したテレビを俺に見せる  
テレビに映っているのは火葬場で俺が焼かれていて、両親が泣いて  
いる場面だった。

「くっ…もうここまで王手が指してあるとは……」  
やつある

「お主が野良猫の代わりに死ぬのが悪いぞ！？」

もしかして俺が悪いのか？自称神様がそう仕向けたくせに…

「それじゃあ俺はどこに行けばいいんだ？」

「とにかくじゃ、お主が行くのは、『バカとテストと召喚獣』に行  
つて貰うのじや」

バカテスか・・・・・・原作は一応知っているけど・・・・・本  
当に大丈夫なのか？

「神様とやらは俺にその世界で生きていけといふのか？といふより  
生きていけるのか？」

「お主ならいけるじやろうな？」

ちょっと待つんだ！そこで疑問詞はおかしい…といふことは俺は  
原作キャラに会わなくてお陀仏になってしまふ確立があるといふこ  
となのか！？

「大丈夫じゃそこまで心配はしなくていいのじや」

自称神様いわく大丈夫らしいんだが不安でたまらない・・・・・・  
つとなると俺は転生者になるのか・・・・・・

「一応じゃが能力はどうするかのつへ・お主に決めさせよつではない  
か」

なんて上から目線な発言なんだ!!  
一応転生をしてくれると言つてゐるがそれがなかつたら俺は本氣で  
殴りかかつていたところだ。

「神様にお任せするよ」

「無欲な奴じゃのう・・・他の奴は『頭を良くしてほしい』とか『  
イケメンにしてほしい』じゃとか『金持ちの家に住みたい』とか言  
つてくるんじゃけどな・・・」

「それじゃそんなことを言つてほしいのか?」

「いや神様として頼つてほしいのじゃが・・・まあいいのじゃそれ  
では行くかのう」

えつーそれは今から転生するつて言つーと?横暴すぎぬよー。

「ちよつと待つんだ!俺の気持ちの整理がまだ整つていない!」

「大丈夫じゃ転生するときはこのボタンを押してからじゃ

自称神様はポケットから変なボタンを取り出した。

といつーとは俺の命はある自称神様の手の中つといつーとなのかー?

「やひやひフシの眼前から『自称』を消してほしいんじゃが?」

あれ?俺の心中読めてる?

自称・・・じゃなくて神様?

「あらためてバカテスに行つてこいなのじゃー!」

神様はボタンを押すと俺の足場がなくなっていた。  
神様がこんなことをやつて良いのか？

「神様だからできたこと」

「てめえー！楽しんでるだろー！」

そうその会話が俺が穴に落ちりぬけの会話だった。

「うわああああああああー！」

え～と・・・これは何で言つんだっけ？

そうだあれだ！

「理不尽だ～～～～～！」

とこうことじで、高校生になつて一度田の毒がやつってきた。  
もちろん舞台は文丘学園だ。

「なんて長かつたんだ・・・今までの生活・・・

今までを思つて起つていろいろなことがあった。  
さすがに〇歳からやつていくのは長かった。ところがいつかやめてしま  
ないのか！？

「まつたく・・・神様は能力について説明は無こじぱりやつて生き

て行けばいいのかわからんよくなってきたぞ」

俺が一人でブツブツいっているなか文月学園の校門が見えた。もちろんその校門には・・・

「斬沢、遅刻だぞ」

そこには拷問が待っていた・・・

じやなくて西村という名のオマージュに包まれた鉄人だった。

「そこで嫌な顔をするな！・・・・・・つたく受け取れ」「はい」

俺は鉄人・・・

「斬沢、それ以上あだ名を言うと補習だぞ」

「あれ？俺の心の中を読み取れるんですか？」

「ということは俺をあだ名で呼んでいたわけだな？」

あっ！はじめられた！

じゃなくて俺はにしむ「・・・鉄人から振り分け試験の手紙をもらつた。

もちろんラブレターではない。むしろラブレターだつたら失神して死んでいるところだ。

「斬沢、お前は本来Cクラスには行けただろうが・

俺は振り分け試験の結果を見るため開けてみると・・・・・

「何でお前は振り分け試験の日にちを一日間違えたんだ？」

Fという大きな文字が俺を迎えてくれた。

## プロローグ（後書き）

この小説で2作目になってしましました！

こっちの『バカと転生者と召喚システム』ほうが良いという意見が多いのならば、最初に書いた小説は多分更新しませんかもですね。作者的にはこっちのほうがやりやすいですしね。

まあがんばっていきますので、よろしくお願ひします！

## オリ主設定!!

名前 鉢沢 拓哉きりさわ たくや

性別 男

身長 178cm

体重 56kg

容姿 茶髪に赤い目

設定

鉢沢は神様?の所為でバカテスの世界に転生される。

家族の構成は三人家族であり、両親は海外にいるため家に居るのは拓哉一人

家は明久と同じマンションで部屋が隣にある。

小学校で姫路瑞希と出会い、中学校では坂本雄一と喧嘩つながりで出会う。

学力は暗記系統は良く、その他はFクラス並

振り分け試験では、振り分け試験の日にちを一日間違えてしまいFクラスにいつてしまうことになる。

## 第一問

Fクラスに行く途中・・・

Aクラスを覗いてみた。

すると、ノートパソコンに個人用アコム、冷蔵庫、リクライニングシートが完備されていた。

「なんてバカに豪華クラスなんだ・・・」

原作でAクラスは豪華だと記していたが・・・本当にここまでやるか？

となるとFクラスは・・・考えない方がいいかも

そして聞き覚えのある声が聞こえる。

「あれ？ 拓哉？ そこで何してんの？」

原作の主人公、吉井明久だった。

「おう明久か、・・・今はAクラスの設備を見て落ち込んでいたところだ。覗いて確かめるか？」

「当たり前さ」

明久がAクラスを覗く

「なんて豪華なんだ・・・」

明久の声がAクラスに聞こえたのか、Aクラスの人たちがコツチを見続けている。

「…………明久、覗くのは止めようみんながこっちを向いている」

「あ、うん分かつたよ」

「あ、うん分かつたよ」

俺達はAクラスを後にした。

そして今は、Fクラス前に到着

「…………ねえ拓哉」

明久が拓哉にFクラスをみて感想を聞きたいそうだった

「ああわかつている…………にしてもこには学校なのか？」

Fクラスはもう廃屋のような部屋だった。教室という原型をはるかに下回っていた。

「それより入るよ拓哉！…………すいません～ちょっとと遅れました」

「早く座れうじ虫野郎！」

明久はFクラスに入つた途端に罵倒される。

さすがだ明久！早くも罵倒されるだなんて明久しかいないな！  
にしても誰が明久に向かつて言つたんだろうな？

俺はFクラスの入つてみた。

「遅れました。明久がうじ虫に関しては否定しません」

「ちょっと拓哉！さりげなく僕をバカにしたな！」

さりげなく？俺はストレートに言つたはずだが？

そして俺は、Fクラスを見渡す。すると教壇にある神童が立っていた

「で？ 何で雄一にいるんだ？」

「一応このクラスの代表だからな。それにしても拓哉は別のクラスじゃないのか？」

「振り分け試験の日にちを一日間違えた」

Fクラスのみんなが哀れな視線で俺を見てくる。  
見ないで！ そんな目で俺を見ないで！

「拓哉も明久と同類なバカだな・・・まあいい戦力が少しでも上がったことには変わりが無いからな」

「明久と一緒にバカにされたのは気に食わんが、戦争については任せろ！」

「ねえ拓哉・・・また僕をバカにしたな？」

当たり前だ！ 明久は正真正銘のバカだ！  
そこにFクラスの担任なのかは知らないがある教師がFクラスに入つてくる。

「席についてもれますか？ HR始めますので」

「席？ そんなの俺が知るはずが無いが？」

「先生、俺の席はどこですか？」  
「決まっていません」

えつ！ マジで！ 決まってないの！ ？」

「明久はどこに座る？」

「うーん、僕は窓側にすわるかな

明久は窓側の一番後ろに座った。  
そして俺は明久の隣に座った。

「えー、おはよげーいります。2年Fクラスの担任の・・・・・  
福原先生が黒板に自分の名前を書こうとしてチョークを探し始める  
チョークすらなかつたら勉強はどうやっていくんだ?  
といつようつこんな設備に泣けてくるぞ

「福原慎です。よろしくお願ひします」

えー、チョークは無かつたらしい・・・

「卓袱台に座布団、えー・・・不備があれば申し出てください。必  
要な物があれば極力自分たちで調達してきてください」

不備?このクラスの全体が不備だと思つんだが?

「では、廊下側の人から自己紹介をお願いします。」

自己紹介か・・・・・明久がどう出るかが見ものだな  
廊下側の人人が立ち上がる

「木下秀吉じや、演劇部に所属してある

美少女・・・・・じゃなかつた美少年の秀吉だった。

「今年一年よろしく頼むぞい」

こつして秀吉の自己紹介が終わった。

そのあと、小柄な人が立ち上がる

「…………土屋康太」

短いな！？つというよりカメラがポケットから顔を出しているが？  
それにもこのクラスは見渡す限り男子だけのクラスなのか？  
と思っている中女子の声が聞こえる

「島田美波です。海外育ちで日本語の読み書きは苦手です。趣味は  
吉井明久を殴ることです」

「あう島田さん…………」

その女子とは島田だった。

それと明久、女子から声をかけてもらっているのになぜ嫌な顔をする？

えーと島田の次は……明久か

「吉井明久です気軽に『ダーリン』ってよんでもくださいね！」

そつかそつか呼んでほしいんだな？

『ダアアーリイーン！！』

Fクラスの大合唱

明久の自己紹介はFクラスの人たちの心たちをつかんだと思うよ！  
で、明久の次は……俺か

「え～斬沢拓哉だ。さつきのバカと幼馴染だよろしく！」

俺は簡単に自己紹介を終わらせた。

自己紹介って短文がいいよね？

そのときある女子の声が聞こえる

「あの・・・おくれてすいま・・・せん」

その声の主を探すとFクラスの入り口に立っていたのは―――

「丁度よかったです。今自己紹介をしてくるところなので姫路さんもお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

・

―――立っていたのは学力で第三位に入っている姫路瑞希だったつて学力三位がFクラスにいつ！

「で、では一年間よろしくお願いしますっ！」

緊張をしていたのかちょっと噛んだと思つが？  
そしてその人物に声をかける

「ところで姫路、体調は大丈夫なのか？」

雄一が体調を聞いていた。

確か、姫路は体調不良で早退だつたつけ？

「「あ！それは僕（俺）も気になるー。」」

明久も姫路の体調が心配だつたらしい

「き、斬沢君！？それに吉井君も」

なんだろ？・・・・・俺は声をかけたらいけなかつたかな？  
けど体調が気になつたので声をかける

「それで体の方は大丈夫なのか？」瑞希  
「あ、は、はい大丈夫です。」

明久は瑞希に無視されたのが傷ついたのか落ち込んでいるな

「はいはい、そこの人たち静かに」

俺達は福原先生に注意される。

そして福原先生が教卓をバンバンと叩くと

バキッ

ガラガラガッシューン

教卓が大きな音を立てて崩れていった。

「替えを持つてきますしばらく待つていてください」

俺は改めて、なんでFクラスになつたのか絶望している。  
え～と　OTL　こんな姿勢で

そのとき明久と雄一がこの教室を出て行く

何を話していたのかは知らないが俺達は福原先生が戻つてくるまで秀吉たちと雑談していた。

変えの教卓が用意され自「」紹介が難なく進み最後の雄一の番になる。

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

そう言って、雄一が教壇に立つた

「Fクラス代表の坂本雄一だ。オレのことは代表とでも坂本とでも、好きなように呼んでくれ」

Fクラスのみんなが雄一に注目する

「さて、みんなに一つ聞きたい、カビ臭い教室・古く汚れた座布団・薄汚れた卓袱台・・・Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・」

一呼吸開け、みんなの心に聞いた

「・・・不満はないか?」

『大ありじゃつづつ！？』

2年Fクラス全体の心の底からの叫び、俺は叫んだりはしなかつた

が気持ちちは一緒に。

布団を持ってきたら寝れそうなスペースがあるがAクラスの設備を見たら当たり前だ。

「だろう? オレだってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

雄一の言葉に不満が次々と出てくる。

『『いくら学費が安いからと言つて、この設備はあんまりだ! 改善を要求する!』』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ? あまりに差が大きすぎる!』

『そこで代表としての提案だが、FクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けたいと思う!』

雄一はAクラスへの『試験戦争』の引き金を引いた。

## 第一問

試合戦争の提案を出した雄一に対して批判の声が飛び交う

『勝てるわけがない!』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ!』

『姫路さんが居たら何もいらない!』

原作ならではの姫路に対するラブ「ホール

そして雄一は堂々としている。秘訣といつても霧島に負けて設備が落ちるのがオチなんだけどな

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝つてみせる」

確かに雄一は学力においてはFクラスだが頭の回転だけはAクラスの主席にまで登りつめるだろう

「普通AクラスにFクラスが勝つなんて不可能だ、だが、このクラスには、勝てる要素が揃っているからこそその発案だ。今からそれを説明してやる」

雄一の自信にあふれた発言にクラスがいっきに静まりかえる。そして雄一はある一人に視線を向けた。

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

「…………（ブンブン）」

「は、はわつ！」

ある人というのはムツツリーーだつた。みんなに見られているのに  
もかかわらず否定しているところがムツツリなんだよね。

「土屋康太。」いつがあの有名な、寡黙なる性識者 ムツツリーー  
だ」

「・・・・・・・！」（ブンブン）

『ムツツリーーだと・・・・・・？』

『馬鹿な、奴がそうだというのか・・・・・・？』

『だが見る。あそこまで明らかに証拠がありながらいまだに隠そつ  
としているぞ・・・・・』

『ああ。ムツツリに恥じない姿だ・・・』

ムツツリーーについての説明が終わつた。

そして次の人は・・・・・・

「姫路の事は説明するまでもないだろ。皆だつてその力は知つて  
るはずだ」

「えつ？ わつ、私ですか！？」

Fクラスの中では学力が一番高い瑞希だつた。

「ああ、主戦力だ。期待している」

「がんばれよ！瑞希

「は、はい！がんばります斬沢君！」

瑞希についても説明が終わつた。  
瑞希に続いて呼ばれたのは

「木下秀吉だつているし、俺も当然全力をつくす。」

秀吉はあまり有名ではないが、姉の木下優子が優等生として有名なのだ。

『おお・・・・・!』

『ああ。アイツ確か、木下優子の・・・』

「そう言えば、雄二つて確かに小学生のこりは神童とか呼ばれてなかつたっけ?』

『それじゃあ、実力はAクラスレベルが2人も居るってことかよ? もしかしたら、やれるんじゃないか?』

『ああ、なんかやれそうな気がしてきた!』

雄二の言葉によりFクラスのやる気みたいな雰囲気が上がってきていた。

『こまできたらオチは――――

「それに、吉井明久だつている

・・・・・シ ンシ

見事にみんな固まつた、さすがオチ担当の明久何を言つても、どこで使つてもいい

ある意味で万能だと俺は思つぞ』

「ちよつと雄二へ。どうしてそこで僕の名前を呼ぶの? 全くそんな

必要ないよね!』

『誰だ吉井って聞いたことないぞ?』

『誰だよそれ・・・・?』

さらば「雄一」が明久について説明を始める。

「そうか。知らないようなら教えてやる。こここの肩書は『観察処分者』だ」

『……観察処分者ってバカの代名詞じゃなかつたっけ?』

「ち、違うよっ! ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「「そうだ、バカの代名詞だ」」

おっ! - 雄一とハモッたw

「二人とも肯定しないで!」

これが違うなら観察処分者ってそういう意味じゃなかつたっけ?

「あの、それってどういふものなんですか?」

ああ、瑞希にとつては観察処分者とは縁が一生無いから分からぬかな?

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういう類の雑用を、特例として物に触れるようになつた試験召喚獣でこなすといった具合だ」

雄一が明久の観察処分者について簡単に説明をして終わる。

『おい、つまり召喚できないヤツが一人いることになるよな  
「気にするな、どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ』

Fクラス全体（瑞希を除く）が役立たずめ……みたいな視線が明

久に集まる

そして雄二はもう一人の名前を挙げる

「最後に斬沢拓哉までいる」

『斬沢？・・・・・ああそこのクズの幼馴染か』

『そこのクズと一緒にぐらいいの成績なんだろ？』

流石は俺だな・・・・・俺の名前があまりにも知れ渡つていないと  
は（泣）

明久はクズ呼ばわりされた所為か体操座りで落ち込んでいるように  
見えるんだけど！？

「拓哉の学力はあるいくつかの教科だけがAクラス並みでそのほか  
はクズみたいな点数だ」

言わないで！クズ呼ばわりしないでっ！

「だが拓哉にはもう一つの名が回っていると思う・・・・・『赤  
目の不良狩り』って聞いたことはあるか？」

『まさか・・・あいつが！？』

『不良しか喧嘩は買わない奴が！？』

『悪鬼羅刹の戦いでは勝ったと聞いたことがある』

Fクラスのみんなが動搖し始めている

俺の中学校の荒れた名前が使われていた。

基本的には小学校から荒れていたと思う

『拓哉は優しいけど不良やヤクザに対しては容赦なかつたからね』

明久はそう言つてくれてゐるが他の人はどう思つてゐるんだろうな

雄は最後の言葉でFクラスをまとめていく

「とにかくだ！俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服したいと思う。皆、この境遇を覆そうー！」

『当然だつ！』

「ならば金貢筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

ପ୍ରକାଶକ ମନ୍ତ୍ରୀ

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！」 Aクラスのシステムテ  
スクだ！」

卷之三

卷之三

瑞希はエケラスの毒酒に飲まれて死んでいた。

「一仕事の宣傳布告の使者で、才覚醜い目に遭ふ。されど、しかも今字が違わなかつた?」

原作では今から本当に騙されるんだけどね

「ほら明久、『チャチャ』言つた男だろ？・・・・・・・・・・これも瑞希のためなんだろ（ボソッ）」

「…………つーわ、わかつたよ」

その後明久はロクラスへの宣戦布告の死者となつた。

数分後

「騙されたあつ！！」

少ししてから明久が帰つてきたが、ぼろぼろになつていた。そこに雄一が・・

「やはりそう来たか

「やはりって何だよ、使者への暴行は予想通りだつたんじやないか！もう少し悪びれろよ！！」

「なんで？これも予想の範囲内だが？」

「わかつて言ってたな！？」

そこに瑞希、島田がやつてくる

「吉井君、大丈夫ですか？」

「大丈夫、吉井？」

明久のぼろぼろになつた姿をみて心配になるよね

「あ、うん。平気だよ、心配してくれてありがとう」

「そう、良かった・・・・・・ウチが殴る余地は、まだあるんだ」

前言撤回ッ！一人だけだつたようだ。

俺は倒れている明久に手を差し伸べる

「立てるか？」

「あ、ありがと拓哉」

俺は明久を引き上げる  
そこに雄一が入ってきて

「明久・拓哉・秀吉・ムツツリー・姫路・島田は今からリーティングを屋上で始めるぞ」

雄一に続いて俺達は屋上に向かった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5292z/>

---

バカと転生者と召喚システム

2011年12月19日17時47分発行